

授業で工夫していること ～学生のやる気を引き出すために～

余郷裕次¹⁾、奥本良博²⁾、谷川裕稔³⁾、伏見賢一⁴⁾

- 1) 鳴門教育大学大学院学校教育研究科
- 2) 阿南工業高等専門学校機械工学科
- 3) 四国大学短期大学部・学修支援センター
- 4) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

本ラウンドテーブルの趣旨

徳島県下のFDネットワーク(T-SPOD)加盟校の教育の質をめざし、各加盟校で授業において学生が主体的に授業に参加するために工夫を凝らしている教員の授業内容を紹介し、情報共有・交換を行うものである。これによってさらなるT-SPOD加盟校の連携強化を期待したい。

1. 絵本とその読み聞かせの導入

(鳴門教育大学大学院学校教育研究科 余郷裕次)

従来、絵本とその読み聞かせは、幼児教育の分野での関心事であった。しかし、近頃は大人のための絵本が話題になってきている(柳田邦男2004)。また、脳科学の分野から、絵本の読み聞かせにおける読む側(大人)への効果が指摘されるようになってきた(泰羅雅登2010)。私も絵本とその読み聞かせの効果に着目し、絵本モニタージュ論による絵本の分析等に取り組んできた。その成果は『絵本のひみつ—絵本の知と読み聞かせの心—』(2010 徳島新聞社他)として発表した。

絵本とその読み聞かせは、小学生や中学生も充分楽しめるものであり、傾聴的な態度を形成し、イライラ感や衝動性を抑える効果があることを経験している。

そこで、大学生に絵本を読み聞かせるとともに、絵本の分析を試みさせたり、実際に絵本の読み聞かせを実践させることで、授業に対する傾聴的態度や受講生の一体感を形成するとともに、将来、小学校や中学校において読み聞かせを実践する知識と技能を身につけさせたい。

2. 初級PBL演習における知恵の授け方

(阿南工業高等専門学校機械工学科 奥本良博)

阿南高専では平成20年度から1年生に対し、希望学科再選択制度を導入し、希望学科を2年生に進級する際に選択できる制度とした。このため、1年生における専門科目の一部として、1年先の学科選択の参考になるように全学科を体験するスタイルの「ものづくり工学実習」と「ものづくり工学基礎」が始まった。発表者の所属する機械工学科では学科のイメージと現実とのギャップを埋めるために「ものづくり学科」としての特徴を前面に押し出した。「ものづくり工学基礎」では座学ではなく、教員の個性とものづくりの楽しさが伝わるように工夫した「初級PBL演習」を実施している。PBLは教育課程初期での導入では知識のない状態での実施になるために単なる「遊び」に近いものになりがちである。そこで今年度からは問題を解決する「知恵」を最初に授け、その知恵を組み合わせて挑戦してごらんという態度で、学生に接することにした。しかもその知恵は一度しか見せない。このことにより緊張感が生まれ、昨年度までよりも真剣に演習に取り組むようになった。

3. 紙面討論を用いたアクティブ・ラーニング

(四国大学短期大学部・学修支援センター
谷川裕稔)

100人規模の講義において、学生主体の学びを具現することは容易ではない。そこで、学生が積極的に授業に参加するひとつの可能性として、「紙面討論」を用いた授業を紹介したい。ここでの紙面討論とは、学生がひとつのテーマに対して、紙面にて無記名で意見を交換し合う教授法を指す。紙面討論の意義であるが、①自分の考えを簡潔に他人に伝える訓練となる、②論理的な主張の方法を学ぶ、③様々な異見に触れることができる、④忌憚なく自分の考えを主張することができる、である。手順は①(教員)テーマを提示すると同時に関連資料を配布する、②(学生)自分の考えを述べる、③(教員)すべての意見に番号をふりタイピングする、④(学生)タイプされた資料を読み、その中から共感あるいは反論したい意見をひとつずつ選びそれぞれについて自分の考えを書く、⑤(学生)「共感」「反論」に分けてタイプされた資料に対する感想を書く、⑥(教員)総括をする、となる。

その結果、開始直後に比べ、より深みのある議論を進めることができるようになった。

現在の学生は、知識の総量が非常に少ない。一方で議論の仕方については多くの経験を経ているため、形の上では議論をして意見形成をしているように見られる。教育者は学生が演じている表層だけの議論に惑わされず、学生が真に身に付けた知識をもとにして精密な議論を進めることができるように指導していくことが要求される。

4. 科学リテラシーとしての基本知識習得の重要性

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 伏見賢一)

徳島大学総合科学部で3年前からスタートした総合科学テーマ科目では分野を超えた複合科学に関する授業を多数開設している。この科目は、現代社会の諸問題を理解し、解決を模索することができる社会人の養成を目的としている。しかし、学生の知識が不十分な状態で現実の問題に対して議論をさせても居酒屋の雑談以下のものにしかない。

今年から開講された3年次対象の講義において、ガイダンス時に基礎知識に関する小テストを実施し、学生の知識と講義で必要とする状況の差を調べた。その結果、知識量の差は予想以上に大きいことが明らかになった。そこで講義開始後1ヶ月半にわたって基礎知識の養成を中心に進めてきた。